

私たちは、いろいろな人の顔と心と力を合わせば、何かよりよい関係やものが生まれると信じて、普段から「連携しよう」「つながろう」という言葉をあちこちで発しています。

「連携」の正確な意味は、広辞苑ほか辞書の解説を読んでいただくとして、その意義やねらいについて、ビジョン委員や自らのボランティア活動をふりかえって、思うところを述べてみます。



兵庫県東播磨県民局ビジョン課長 山内喜夫

「連携」とは 足し算？掛け算？それとも…？

「連携」は、複数の個人、組織が関わり合い、高い結果を求めるときに活用する方法の一つです。だから、ねらいは、より高度な「成果」だと思えます。

あるアスリートの講演会で聞いた話ですが、より高いレベルの成果を求めるには、「努力」・「技術」・「感謝」の3要素を揃える必要があります、この3つの関わりは足し算ではなく、掛け算であるとのことでした。どんなに努力をして、技術を高めても、サポートをしてくれる人への感謝の気持ちがなければ、成果は下がり、極端に言えばゼロになるということです。

農林水産業の6次産業化は、1、2、3次産業の融合による産業の高度化を目指す言葉ですが、有機的・総合的結合を図るという観点から、「 $1+2+3=6$ 」の足し算ではなく、「 $1 \times 2 \times 3=6$ 」の掛け算の考え方が理に適うと言われるのは、前述のことと無関係ではないと思えます。



利用しあうという関係になりたがる

地域づくりにおける他者との連携も、これらに通ずるものがあると考えます。実際に、活動する時、パートナーが誰でもいいということにはならないはず。やはり、志が同じとか、志が違って、双方に何らかのメリットがあることが見込めなければ、手を携えようとはしません。利用しあうという関係にはなりたがらないでしょう。

だから、料理教室を実践するビジョン委員の複数グループが、それぞれ別の道を模索して活動するのも、自然な動きで、仕方がないことだと思います。ビジョン委員会という「くくり」から見て、これらの動きをまとまりがない、合理的でないと論じるのではなく、それぞれが、目的のために、それぞれ第三者との有意義な連携を構築して、活動に取り組めば、トータルでコスト以上の成果を地域に還元できると考えたらよいのではないのでしょうか。

結構エネルギーがいる行動

第6期東播磨地域ビジョン委員は、多彩な顔ぶれが揃ってはいるものの、東播磨地域71万6千人の中のたった70人です。「連携」の範囲としては、かなり狭いと言わざるを得ません。

70人の中で仲間を見つけて活動するのみならず、70人が、それぞれの知識、経験、人的なネットワークを生かし、活動しやすいグループに細分化して、それぞれのグループが第三者との「連携」を模索しながら、ビジョンの実現（＝地域課題の解決）に向けた取り組みを推進することは、ある意味、最も成果が出やすい方法だと考えます。

しかしながら、この「連携」は、結構エネルギーがいる行動であり、躊躇することがあります。「連携」の過程の中で、意見の対立や衝突を繰り返してきた経験があるとともに、関係を維持するためのおつきあいや行動の妥協などが想定されるからです。そういう煩わしさや精神的な負担を避け、あまり多くの「連携」を求めない行動も、当然理解できます。

感謝の念を持って掛け算志向で

それでも、ビジョン委員は、ビジョンの実現に向けた取り組みを推進することが求められています。それぞれのやり方はあるでしょうが、人的なネットワークの構築と活用は、成果を求めるといった観点から、前述の努力、技術と合わせて必要な「感謝」をそろえることにつながるものだと思っています。協力や支援してくれた人たちへの感謝の念を忘れなければ、築いた「連携」は、より生かされるものとなるでしょう。

少しずつでも、よりよい地域社会のために、いろんな個人や組織とつながり、掛け算志向で活動の成果を高める連携をしていただきたいと思います。今回の私の寄稿については、ぜひみなさんのご意見を待ちたいと思います。